

演題番号:8

テーマ 3:女性とこどもの健康

アフリカ、中南米、アジアにおける思春期世代の孤独感の頻度と関連要因の検討

井神 健太¹、細澤 麻里子²、池田 愛³、磯 博康²

¹ 順天堂大学小児科

² 国立国際医療研究センター国際医療協力局グローバルヘルス政策研究センター

³ 順天堂大学国際教養学部

【背景】 思春期世代の孤独感は、その心身の健康への影響の大きさから、近年、重要な公衆衛生課題として注目されている。しかし、既存研究の多くは高所得国で行われ、低・中所得国における知見は乏しい。本研究では低・中所得国を中心とする世界 70 か国の思春期世代における孤独感の頻度とその関連要因(性別、親友の有無、いじめられた経験の有無)を国・地域ごとに比較検討した。

【方法】 13 歳～17 歳の学生を対象とする Global School-based Student Health Survey(調査年度 2003 年～2018 年)データを用いた。過去 12 か月間に孤独と感じたことが「しばしばある/常にある」と回答した場合を孤独感有りとして、その有病割合率を算出した。さらに、多変量ロジスティック回帰分析を用いて関連要因に対する有病割合比を国毎に算出し、メタアナリシスにより全体および WHO 地域別の統合推定値を算出した。

【結果】 対象者 248,017 人のうち、11.7%(95%CI: 10.6-12.7)が孤独感を感じていた。孤独感の有病割合率は国毎のばらつきも大きかったが(2.1%ラオス～25.9%アフガニスタン)、特にアフリカ地域(13.1%)や東地中海地域(14.8%)で高かった。全体としては、女子(vs 男子 有病割合比=1.4 95%CI: 1.3-1.4)、いじめられた経験あり(有病割合比=2.2, 2.1-2.3)、親友がいない(有病割合比=1.8, 1.7-1.9)児において孤独感が高かった。性別と親友の有無と孤独感の関連は国毎に異なったが、いじめられた経験と孤独感の関連はほぼ全ての国で認められた。

【考察】 低・中所得国の思春期世代の 12%が孤独感を経験しており、低・中所得国においても思春期の孤独感対策が必要である。孤独感の関連要因は国毎に異なることから、各国の事情にあわせた介入策を講じる必要がある。一方で、いじめられた経験と孤独感の関連は一貫しており、各国共通の介入点になりえる。